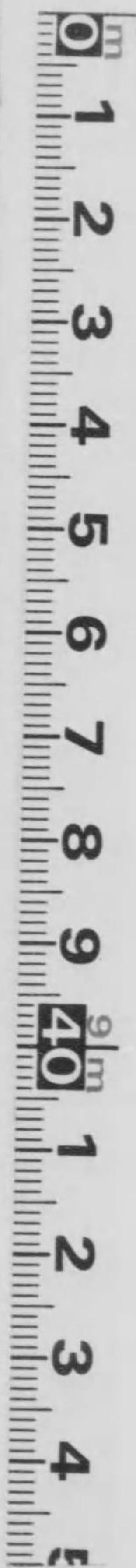


61131
0-38



始



1470
17

食糧政策
する關
諸問題

373/477

611.31
0.38

目次

一 國家喫緊の大問題……………一

二 主要食糧の需給状態……………四

三 食糧に對する諸政策……………一

 第一項 外米輸入促進策……………一

 第二項 配給圓滑策……………二

 第三項 代用食獎勵策……………三

 第四項 食糧増殖策……………四

四 食糧慣習涵養の急務……………二七

五 終に臨んで……………三〇

目次了

大正
9.5.10
内交

食糧政策に關する諸問題

農商務技師 岡出幸生述

一 國家喫緊の大問題

私は國家的の見地から、今日の日本の食糧問題が如何なる情勢にあるか、又此食糧の過不足に處して政府並に一般官民が如何なる方針の下に進んで行けば宜いかといふ事共に就て所見を披瀝せんとするのである。御承知の如く國民經濟上、又社會生活上考慮すべき問題は枚擧に遑なき程であるが、就中最も重きを置くべき所ものは食糧問題であると思ふ。即ち國民が其生活上不斷に不安を感じて居ては、決して國家としての發展を期することも難く、又民福を増進するといふことも覺束ないのである。平常の場合に於ても、食糧問題に不安を感じしむることは、社會人心に容易ならざる影響を及ぼすものである。殊に一朝有事の曉に於ては更に憂ふべきものであるのである。大正

七年の夏八月、富山縣の一小漁村から起りしところの食糧不足の聲が、恰も一波擧りて萬波起るの勢を以て、津々浦々まで忌しきところの社會的動搖が及んだことは、今尙吾人の耳朵に新しい事實ではないか。食糧問題は、彼の衣類とか、或は鐵類又は建築用材と云つたやうな生活資料の問題よりも一層重大なる問題である。成程日本の内地に於て一朝米麥不足の場合には、芋を食つたら宜からう、雜穀を攝つたら良いだらうと一口に言つて仕舞へば何でもないことのやうではあるが、なか／＼おいソレと簡單に行くものではない。生産地と消費地とは自から離れて居る、その間に種々雜多の地理的事情なり、經濟的關係の複雑なものがあらう。今大消費地に於て食ふ可きところの米がない、サー麥もないと大騒ぎが始つても、矢庭に種子を下して仕立て、火急の需に應ずるといふ藝當は出來ない、而かも我々が日常活動して行くのには、一日半日も缺くことの出來ないといふのが食糧である、その重大なることは到底他の何物を以てするも匹敵せしめがたい命と掛換えな問題である。羊毛の問題も相當喧しいやうであるが、洋服の如きはマダ／＼着用する人間も割合に少ないから、未だ國民一般の痛苦の懸ると

ころでない、我慢して我慢の出來ない程度のものでない。三年に作る洋服を五年目に延ばすとか、何とか實際經濟上の餘裕を付けるからでもあるが、羊毛の非常な不足を訴へながらも、兎も角忍んで忍べない問題ではない。ところが食糧はナカ／＼さうは行かない、我々は一日たりとも食はずに活動することは出來ないのである。此點から考へて見ても、最も人間の生活上重要な問題は食糧問題であるといふことを斷言して憚らぬのである。殊に平常の場合ならばいざ知らず、兎に角外國からでも食糧の若干部分を仰ぐといふ場合、そんな場合には國際間の經濟原則が行はれるのであるが、目下の如く歐洲大戰亂が熄んだと言つた許りて、世界の經濟界に及ぼしたその餘波といふものは容易に平調に戻らないのである。却つて或る方面に於ては、大戰亂當時よりも一層甚だしいところの影響を受けて居る實情に鑑みて見れば、特に此際我々の生活に於て叶はぬ食糧のことに就ては一片の空理空論は許されない、徹底した考究を経て、如何にしても内地での自給自足計畫、即ち食糧の國家的獨立の大策を立て、國民生生活の基礎を安固にし、大和民族の大發展を期するためには、何うしても食糧の不

安から脱離しなければならないといふ一大決心を把持して、國家と民衆と極協力一致して事に當らなければならぬと思ふのである。

二 主要食糧の需給状態

米はどの位生産され、どの位國民に消費されて居るか。此生産消費の關係に就いて極く概略を述べて見たいと思ふが、食糧問題の喧唱する、現下、随分色色の新聞、雜誌その他の言論機關に、江湖の食糧に關する知囊は充盈されて居る折柄、蛇足千萬の嫌はあるかも知れないが、私は農商務省の統計に現はれたる數字に準據して、主要食糧の最近の状態を考へて見たいと思ふ。

先づ順序として米の生産の方面から論を進めることとするが、米の生産は年々歳々内地に於ても、將た又朝鮮、臺灣に於ても増加の形勢を示して居るのである。今之に就て具體的に述べて見ると、大正元年を末期とする前五ヶ年、此平均に於て、日本内地で收穫したところの米は五千〇五十八萬石である。ところが最近五ヶ年の平均、即

ち大正二年から大正六年までの平均に就て見ると五千五百二十四萬石、歩合で言へば約九分程の増加を示して居るのである。又朝鮮に於ても大正元年を末期とする前五ヶ年の平均に於ては八百六十五萬石、最近の五ヶ年平均に於ては千百六十八萬石、歩合で言つて見ると三割以上の増加になつてゐて、内地の歩合に比較してその増殖の速なる傾向を知ることが出来るのである。臺灣に於ての産米状況は、前五ヶ年平均に於て四百四十萬石であつたものが、最近の五ヶ年平均に於て四百八十萬石となり、内地の産米の進歩と類似した數を示して居るのである。そこで今述べたやうに、日本内地、朝鮮臺灣に於ての米の生産は年々歳々、殊に最近に於ては頗る著しい進歩の跡を示してゐるのであるが、これらの進歩は一體何に基因するものであらうか。勿論耕地面積の擴張すること、既耕地に對する土地改良、或は農事改良、是等に起因して米の増殖の結果となつたのである。即ち耕地が新しく擴張されて來ると、既耕地の改良に依る生産増加、此二つに依つて増殖されて來たのであるが、其割合はちよつと素人考には耕地が非常に擴張されて、それが爲めに生産が増加されるやうに思ふかも知れないが

其の實、既耕地の改良の方が非常に歩合が多いのである。假りに十五年前と今日とを比較して見ると、十五年前の五ヶ年平均と、最近五ヶ年の平均とを比較して見ると、十五年前を百とすれば耕地面積の殖え方は百〇八、即ち八パーセントだけ殖えて居るところが生産額の増加は十五年前を百とすれば、最近の五ヶ年平均に於ては、百三十即ち三〇パーセントの増加を示してゐるのである。一方が八分、一方が三割といふのであるから、ざつと二割二分方は、既耕地の改良に依つて米の産額が増加したものと見て大差ないのである。そこで日本全體に亘つて今後農事改良、其他に依つて生産額を増加し得べきものが、過去に於ける経過成績に鑑みて、將來に於ても相當あるべき筈といふことも強ち豫想に難くないのである。

以上述べ來つた生産方面の事項に相對照せしめて、米の消費の方面に就て述べると矢張り大正元年を末期として前五ヶ年の平均に於ては、當時の日本内地の人口の平均が五千〇七十三萬である。それから一人當り一ヶ年の米の消費額が一石三升七合になつて居る。そこで米の消費總額が五千二百六十三萬石と云ふ石數を示してゐるのであ

るが、我が日本人は人口の増殖率に於て世界屈指の國であるので、年々歳々非常に殖える。昨今では毎年七八十萬人づゝも殖えつゝある状態であるが、兎も角最近の五ヶ年の平均に於ては五千四百六十萬といふ平均が出るのである。又一人當りの米の消費額、是も農村人口の流出、都會人口の集中の現象、或は所謂生活の向上といつたやうな様々の影響が互に重複して、米の一人當り消費額も年々歳々増加しつゝある傾向であつて、最近五ヶ年に於ける一人當りは一石五升になつてゐるのである。そこで消費總額が五千七百二十一萬石で、五百萬石以上の増加を僅々五ヶ年の間にしてゐるといふことは、此數の上で明に現はれて居る次第である。そこで最近、と言つても大正六年までの話であるが、最近に於ける消費額の増加を計算してみると、約九十一萬石づつ一ヶ年に殖えて居るといふことが出て來るのである。日本内地で一ヶ年にこれだけ米の消費が殖えつゝある。生産の方はどうかと言へば、内地の生産は一ヶ年に九十一萬石づゝ殖えつゝある。斯く觀じ來れば消費、生産の兩者の間に都合よくバランスがとれて居るではないか。大正六年迄は生産も消費も互に九十一萬石づゝの増殖を

爲しつゝ丁度均勢を保ちつゝあつたが、大正六年より彼の米騒動のあつた大正七年にかけては、工業が空前の繁盛を來したため、人口の都市集中が著しき現象となつた結果、米の消費が急激に殖えた。人口の増殖率といふものは大して變るものでないが、一人當りの米の消費額が非常に殖えた結果、大正四年より六年に至る三ヶ年平均に於ては一石六升八合を示して居たのが、大正七年の如きは一石七升二合に上つて居る。斯くの如く近時に於ける消費が非常に殖えたので、從來の生産と消費とのバランスが破れて仕舞つたのである。即ち大正六年と七年との二ヶ年間に於ける消費は、之をその前年に比べると百六十萬石からの増加になつてゐるのである。そこで今までは年々九十一二萬石づゝ殖えて取れて來て居た所のバランスは、消費の非常なる増加の爲めに壞れてしまつた。それと今一つは、大正六年の日本内地の産米が餘り澤山でなかつた、ヤツと平年作程は穫れたが、五千四百五十七萬石で、前年の五千七百萬石に比して甚だしい減收であつた。詰り大正六年の生産米がその翌年の大正七年に於て大部分消費されるのであるから、大正六年の形勢が大正七年の食糧問題に密接の關係のあるのは

當然なことである。これが偶々彼の忌むべき米騒動を惹起爆發せしむべき一素因であつたのである。同時に一面東洋の主食物たる米が歐洲の野にどんどん行き出した、即ち外米が歐洲に行つた數量は非常なものであつた。これらの事は本邦の食糧界に悪い影響を及ぼして、米騒動に對しても淺からぬ因果關係に立つものであることを思ひ、我人共に一段の考慮を拂ふ可きことと思ふ。

さて大正六年は不作、大正七年の八月は米騒動、而かも大正七年の生産額も亦良好でなかつた。その收穫高五千四百七十萬石、その前年に比べて僅かの増收しかなかつた。ところが人口の方は遠慮なく一ヶ年七十萬人も殖えるし、一人當り消費額は年々歳々増す一方である。その結果大正八年の食糧は極めて窮境に陥つて、非常に苦しい立場になつたのである。殊に外米の買付けは益々その急を告げ、従つて産地の相場は著しく暴騰し、甚だしきに至つては石百圓からの相場を呼んだことは決して珍らしいことでないやうな状態である。殊に今まで御得意であつたところの英領印度の産米は殆ど輸出禁止をやつた結果、正面からは流れ込んで來ないといふ有様になつて、大正

八年の食糧界に暗雲が漲つたのであるが、幸なるかな大正八年の收穫は、第二回豫想にも六千萬石以上に上つてゐるし、臺灣に於ける産米も、今までの報告を綜合してみると頗る好成績であるが、唯朝鮮の生産米が早魃のために少し悪いといふ報告もあつたが、是とても従前の成績に比すれば遙に増收であることは疑ふを要しないのであるから、大正八年の收穫高に影響を引く大正九年は先づ割合に内地の産米が豊富であらうと思ふが、併し人口の増加なり、一人當り消費は増加する許りであるから、今以て安心であると云ふことは斷言することは出来ないのである。尙言忘れたが生産が九十一二萬石、消費が九十一二萬石づゝ増加して、此關係がバランスが取れて居ると云ふものゝ、大正元年以前の五ヶ年に於ては既に外米の補給を受けてゐるのであつて、この當時生産と消費とが互に持續の形勢に在つて、日本で必要とするだけの米が過不及なく生産されてゐたのならば眞に祝福の至であるが、此前五ヶ年に於ては、平均一ヶ年百六十萬石乃至二百三四十萬石づゝの外米の補給を受けてゐたのであつて、これだけはその間でバランスはとれてゐても不足といふ次第である。故に内地米の増殖なり、食

糧問題の解決には一層の努力を要することは明白になつて來たのである。

斯くの如く日本唯一の食糧とせられて居る所の米の需要供給の關係は常に不足勝て幾分づゝても代用食、或は外米の補給を受けなければならぬといふ状態であるから、我々は今後如何なる方針に向つて進んだら良いか、此國民の食糧に對する對策は如何にすべきかを考究し、國家としてもその解決に努力しなければならぬのである。

三 食糧に對する諸政策

食糧に對する所の政策は極く簡明である。即ち先づ第一に内地米の生産を出來る丈に増殖せしむるの方策を執ること。第二は應急的に同時に一時的の政策であるかも知れないが、配給を圓滿にする。米の配給が面白くない結果、消費地には少しも米がないうのに生産地には餘つて居て、兩地の有無相通じないといふのでは、食糧問題を難澁に陥らしむるものであるから、配給を出來得る限り圓滑にすると云ふことが應急政策として必要である。又内地に著しく米の不足を來たして居る場合に、日本に出來る所の

米を少しも海外へ出さしめないやうにすることも、應急策としては肝要である。即ち輸出禁止とか、或は輸出制限とか言つたやうな形となつて現れる國策はこれである。その外の方針としては、外米を出來得る限り入れるといふこと、何か米に代る可き所のものを以て米の不足を補はうといふ政策である。以上の外には良案はなからうと思ふ。そこで從來政府に於てやつて來た各方策に就き項を分つて述べよう。

第一項 外米輸入促進策

是は時局以來直ちに政府に於ては外米管理をやり、盛に産地に於ける買付をやり、或は内地で外米の拂下を續行したけれども、大正七年十月三十日に至り、時代の推移に鑑みて外米管理は之を一時中止し、その代りに關稅撤廢、詰り米或は麥に就ては從來百斤に就て一圓づゝ、即ち十石二十五圓、一石二圓五十錢の輸入税が課せられて居た、此税金を撤廢して、自由に外米の入る途を開いたのである。所が其後益々歐洲の買付が激しくなり、又大正六、七兩年の外米の産地の生産額が面白くなかつた結果、外米産地に於て品薄となり、産地の値段は非常に暴騰し、到底關稅撤廢ぐらいの手緩いことは

商人が買はない。寧ろ向うへ賣りたいと云ふやうな相場になつて來たので、更に外米管理を復活して政府自ら局に當り、關稅撤廢の他面に於て政府自ら買付をやり、同時に政府の運送船を利用して、出來得る限り内地へ外米を輸入することに努め、而して大消費地に於て前後七回に互つて外米の拂下げを實施した。かくの如く臨時政策を行つて、出來得る限り外米の輸入促進を圖つた次第である。又米以外の小麥或は小麥粉と云ふやうな物資に就いても、大正八年五月に關稅を撤廢し、すてに輸入促進の途を開いてゐるのであつて、兎にも角にも外國食糧を少しでも多く内地に輸入せんものと政府は相應の努力を拂つて居るのである。

第二項 配給圓滑策

食糧物資の配給をして圓滑ならしむるに就ては、爾來地方各府縣の官民相提携連絡して種々努力して來たのであつて、新米が出來れば逸早く消費地に廻して貰いたい。又米に對しては優先輸送をやつて貰つて、他の貨物よりも先に送るといふことも協調して行つて居る次第であつて、必要な期間を決めて無賃輸送するといふやうなことも

時々行つて来たのである。尙輸出の制限に就ては、時局以來直ちに、大正三年九月であつたが、農商務省令で米、麥、小麥粉、此三つの種類を輸出する場合には農商務大臣の許可を経なければならぬといふことに規定し、極力輸出の防遏に努めたのである。殊に米の如きは殆ど輸出禁止の状態となるまで強く制限を加へられたのである。小麥粉の如きは近來餘程東洋の市場に於て日本の小麥粉が市場の權威を獲るやうになつて居るし、又小麥粉の生産歩合が過剰になつて居る。最近の統計に依れば一ヶ年五十萬石乃至七十萬石位は生産過剰になつて居る。尤も斯う云ふものゝ過剰といふことは考へやうに依つて何うにてもとれるものであるが、兎に角今日までの消費の状態では五十萬石乃至七十萬石餘るといふのであつて、是が麵麩として小麥粉を大いに消費する、或は小麥粉を精白して米に混じて食べると云つたやうなことが最近行はれて居るやうであるが、斯くの如くに食法が進めば、小麥粉の消費は更に一層進んで、過剰どころではない、却つて不足を生ずるやうなことにならないとも限らないが、今日の日本の小麥粉の消費状態は、五十萬石乃至七十萬石の生産過剰になつて居る。等々に就ては

輸出制限を緩にして、幾分づゝ或は歐羅巴に出したこともあるし、或は支那、南洋方面に掛けて輸出してゐるのである。此輸出制限に就ては色々議論があるが、歐洲各國は戰時方策として大抵輸出禁止を行つて居るが、併し輸出制限の方が應用の範圍が廣く、唯必要と認めれば殆ど輸出禁止と同じだけの權力を持つことが出来るし、又幾分生産過剰のやうな状態になつた場合には手を緩めて相當に出すといふ、即ち緩急その宜しきを得ば、寧ろ輸出禁止よりも輸出制限の方が、策として進んだものと思ふ。是が時局以來我國の執つた政策である。

第三項 代用食獎勵策

代用食の獎勵、即ち米が不足して居るのであるから、米以外に米に類似のものがあれば、其營養的の方面から考へても、國民の嗜好の點から考へても、なる可く米に近いやうなものを以て米に代へると云ふ主旨で代用食の獎勵に努めたのである。只今では種々の食糧農産物があつて、又地方に依つては相當代用食の慣行さるゝ地方もあるが、國として、又互に大いに代用食の獎勵普及をやらうといふ以上は、色々の點を

考察した結果 眞面目にやらねばならないと思ふ。例へば蕎麥の如きは、日本で生産する数量は極めて少いものである。斯ういふ少いものに目を付けて、此奴は非常に日本人の嗜好に達するから大に一つやらうと云ふやうなことは、國としては勿論策の得たものではないが、又一般の消費者側から考へても、もつと他に適したものを選ぶべきだと思ふのである。次に豆の如きは何うであるか。大豆は外國から非常に輸入をして居るが、隠元豆、即ち菜豆、是はなか／＼大きな數量を出して居る。殊に時局以來亞米利加に非常な數量を出して居るのであるが、是等は生産豊富といふ點からすれば、割合に良い代用食であるが、唯成分を考へて見ると、元來が蛋白質に富んでゐるのであるから、主成分が澱粉であるところの米の代用食としては、國民衛生の見地からして、（？）といふことと思ふ。勿論今日の學者の見解によれば、日本人は歐米人よりも澱粉を多く攝つてゐて蛋白質の攝り方が常に不足してゐるとの説もあるから、さういふ考へから豆を以て米に代へるといへば一應の理由とはならうけれども、それは殆ど豆許り食つて米は食はないやうにするといふやうな極端な状態になつては、却

つて我々の胃腸を害し、消化の實を低めるといふやうなことになるのである。馬にしても、牛にしても、是に濃厚飼料のみを與へると、却つてその健康によくないのであつて、相當に淡泊にする、即ち澱粉的の食物を攝らさなければならぬのは申すまでもないことである。故に蛋白質の不足して居るのを補ふといふやうな意味に於てするならば大いに結構な食糧であるが、米の代りにやつて見ようと云ふ大きい目的のためには賛同しかねる點が多いのである。其外の食糧農産物を考へて見ると色々様々のものがある。或は麥、或は甘藷、馬鈴薯、其外粟とか、黍とかといつたやうな雜穀類があるが、其中で割合に吾人の嗜好に投ずるものもあるし、又生産が現在將來共に豊富である甘藷や馬鈴薯の如きもある。勿論麥類も重寶であつて、殊に麥に就ては相當食用慣習も付いて居るのであるから、此際大いに麥食の奨励を行ふことは必須の事であるが、それと並行して奨励したいのは甘藷と馬鈴薯である。甘藷は先づ最近の統計に依れば一ヶ年十億萬貫の收穫高を示して居り、馬鈴薯の方は三億七千萬貫であるが、年々歳々增收傾向を示し、殊に馬鈴薯の如きは、本年(大正八年)の豫想では四億一千万

實は確實と認めらるべき形勢である。要するに甘藷にしても、馬鈴薯にしても、所選ばず能く成育し、しかも外の穀物類に比べて生産歩合が割合に多い、殊に馬鈴薯は短期間に收穫することが出来る。普通四ヶ月乃至五ヶ月といふ短期の間にとれるのであるから、暖い地方であると、年に二度穫れる。關東地方では既に二度穫つて居る、關西から四國、九州あたりになると確かに二度はとれるのである。極く僅かの期間で、如何なる所でも生育し、併もその收量が多いのであるから、是を國民の常食の用に供するといふことは頗る合理的である、又是非さうしなればならないことと思ふ。現に獨逸の如きは天然の食料としては、馬鈴薯が殆ど主要なる位置を占め、英國に於ても英蘭地方になると殆ど馬鈴薯が副食物である。歐米に於ても斯く立派に副食物として馬鈴薯を攝つて居るのであるから、日本人の嗜好に適するならば、是非吾人の主食の一つにしなければなるまいと思ふ。是等の事に就いては、殊に大正七年の秋以來農商務省の方から各地に人を出して府縣當局の方に援助を乞ひ、馬鈴薯飯或は馬鈴薯に對する一般の嗜好力を増進せしむる目的を以て試食會を催し、或は講演會を催したので

ある。馬鈴薯飯の如きは其期間に依つては頗る遺憾な場合もあるが、特に夏季の如きに於て之を食すれば、殆ど内地米と何等選ぶところなき程の好味を呈するものであるから、米の代用品の一として廣く推奨する所以である。

甘藷は割合に古く本邦に渡來し、之に對する嗜好も餘程進んで居るが、未だ間食物として攝らるゝ地方が多いやうである。されば蒸芋その他の方法に依り、飯の前に少し詰め込む習慣にすれば節米上の妙策であらう。要するに如何なるものでも、其地方に古來からの代用食の習慣があれば、それを一層徹底的に助長して、單に米ばかりに依るといふやうな危険な食糧制度の域から脱せねばならないと思ふ。

第四項 食糧増殖策

食糧の増殖といつても、主として米の増殖に就て述べるのであるが、此米の生産餘方はまだ大きいものがあるので、決して悲觀する必要はないのである。統計に依れば十五年前と當代とでは既に二割以上の増殖の跡を示して居るのであるから、此際一層農家の緊張心を起さしめ、適當な施設を行へば、内地の生産額は遂に増加するこ

とが出来ることと思ふ。現に本年（大正八年）の米作の如きも、氣候の點から見れば日本全體としては決して良好でない、苗代時期、成熟時期共に豊年の徴候に乏しかつたにも拘らず、本年内地の生産米は六千六百萬石以上になつて居る、第二回の豫想は殆ど實收高に等しいものであるが、兎に角六千萬石以上である。是は米價奔騰に刺戟されて、生産者たる農業者の心が緊張した結果、米作に就て非常に努力したためであつて、此努力を一層強く作興せしむるならばその効果は甚大なるものがあらうと思ふ。此内地米の増加方法としては、政府は彼の開墾助成法を通過せしめ、之に依つて大に未墾地開拓を行ひ、田畑の面積を擴張せんと計畫を立てたのである。實際今日の日本の國土の面積と耕地の面積とを比較して見ると、歐米各國のそれに比して非常に遜色があるのであつて、國土の面積の一割五分しか耕作されて居ないのであるから、まだ一餘程の開拓餘地があるべき筈の状態である。各府縣に互つて調査したるものによれば、内地では百二十一萬町歩、北海道では十四萬町歩、合計約二百萬町歩の可墾地があるわけである。今後二三十年の間に於て開拓さるべきものは、内地で五十五萬

歩、北海道で十二萬歩であつて、是等は少々でも資金をかけるなり、技術上の改良、或はその指導宜しきを得るならば、變じて耕地たる可き状態であるから、開墾助成低利資金を廻してその目的を達せんとの方策に出たのである。尙新しい開拓事業に助成を與へてやると同時に、既耕地の改良の方面にも、既に幾多の方策が講ぜられて居るのであつて、品種改良を行ひ、大正五年以來年々八萬圓の金を各府縣に散じて優良品種の育成、即ち良い稻や麥の種子を育成する事を奨勵し、國庫より補助金を出してその事業を援助して來たのである。専門家の言によれば、品種の改良だけでも、少くとも在來の收穫の五分以上は増すであらうとの事である。五分と云つても二百七十萬石内外の増收となるのである。是とても徹底的に行ふならば、内地米の増殖に貢獻するところ甚だ大なるものがあるのである。米麥のみならず、更に範圍を擴めて、粟とか、黍とか、大豆とか、甘藷、馬鈴薯、斯ういふやうなもの、品種改良育成、或はその良種の普及に就て各方面の機關に對して補助を與へ、以て食糧品の内地増殖を期してゐるのである。

次に肥料の方面に於ても相當の改良を促して居るのである。作物に於ける肥料は、宛も吾人に於ける食料と同じ關係に立つもので、一定の面積より多量の生産を擧ぐるには、勢ひ多量の施肥をしなければならぬといふ結論に歸著するのであるから、成る可く肥料を安價に、しかも多く生産する事が目下の急務の一つである。而して良い肥料を農家に提供し、その肥料を巧に施す方針の下に改良、或は經濟的施肥法、といふやうな方面の研究を奨励してゐるのである。兎に角日本内地で使用する所の肥料の増加は四億萬圓以上に上つてゐる。故に之に對する政策は相當重大なもので、肥料のみの立場から論じてても、國家の生産業に及ぼす影響は蓋し大なるものありと云はざるを得ないのである。其四億萬圓の中で、販賣肥料、即ち俗に云ふ金肥といふものは一億九千萬圓餘になつてゐる。すてに本年(大正八年)あたりは二億萬圓を突破して居ると思ふ。その外一億九千五百萬圓位は自給肥料といつて、農家が自から拵へる、或は堆肥であるとか、或は糞尿といつたやうなものである。斯くの如く四億萬圓の肥料を内地で消費して居るのであるから、十分に之を改良すると否とは、農業生産上密接な關係のある問題である。

肥料に就ての施設としては、不正肥料防遏のため、各府縣に肥料検査官吏といふものが置いてある。是は農商務省から内務省に委託して各府縣に二人乃至三人、多いところでは五人位あつて、時々肥料を検査し不正な肥料の排除に努めて居るのである。肥料の使用量が増すと同時に、肥料に對する農家の知識が未だ不徹底であるから、その間に不正肥料が跋扈するので、其後更に一名づゝの検査官を各府縣に増派し、その費用として四萬圓の經費を計上したのである。

自給肥料の改良に就ては、その中の主要なる位置を占めて居る堆肥の研究には、農會自らその任に當り、千葉にある畜産試験場に於ては三萬圓の經費を以て堆肥の研究を行つて居るのである。自給肥料中綠肥、即ち紫雲英、青刈大豆の類であるが、是等の改良に就ては年々二萬圓弱の金を使つて研究して居る外に、綠肥栽培の非常に盛なる富山縣、福岡縣と云ふやうな縣に、特にその研究を委託して、地方的に綠肥の研究を圖つて居るのである。

肥料中最も重要な關係を有する窒素肥料、即ち空中窒素利用の研究は、帝國大學の麻生博士に委託して二三年前からやつていたといつて居る外に、大正七年から窒素研究所が出来て、其所では直接空中窒素の利用上種々の試験研究に従事してゐるのである。

肥料に就ては其外色々の講習會又は講話會を媒として、一般農家の知識の扶植とその啓蒙とに努力してゐるが、尙内地の食糧増殖の一施設として増收共進會を大いに奨励してゐる。増收共進會といふのは、増收顯著なるものを表彰する極めて簡單なものであつて、うんと増收の實を擧げたものに對しては、國家又は府縣が賞金を與へて大いにその勞に報い、表彰するのであるが、亞米利加にもやゝ之に似たものでイントコンベンションと稱する共進會がある。大正八年以降地方に於て米麥の増收共進會を行ふ場合には、奨励の主旨に依り相當の國庫補助があるやうになつた。かくの如き事の効果の顯著なることは到底都會人士の想像も及ばぬものであつて、一例をあぐれば、兵庫縣の津名郡の山田村では、大正三年以來村で増收共進會をつゞけ、非常な奨励となつて居

る。この山田村では大正三年前までは、村全體の生産米が八千石位にすぎなかつたが、村一般に増收の研究に努め、同時に農事の鼓舞作興に鞭撻した結果二千石を増收するに至つた、即ち一萬石の米を收穫するに至つたのである。一小農村であるが、増收共進會の効果は斯くも著しい現象を示したのである。最近滋賀、奈良の兩縣下を視て、各地の増收共進會を見たが、その努力の結果は目ざましいものがあるのである。現在の日本に於ては、一段歩の平均収量は一石八斗一升であるが、この増收共進會に出て居る最大なるものは六石以上になつてゐるのである、滋賀縣では六石以上のものさへあつた。勿論總ての人に向つて増收を迫るのは無理であるかも知れないが、假に日本全國で反當り二石位づゝ増收して呉れると、平均六百萬石以上の増收となるのである。此増收共進會を大いに奨励して以て一般人心を鼓舞すると同時に、實際収量の増加に努力して行くならば、五六百萬石の内地生産増加は大した困難なことではないと思ふ。其外食糧増殖に就いて政府の行つた施設は多々あるが、府縣に食糧事務を擔任してゐるところの技術官を置いた場合には何か奨励金を出す、或は直接當業者に接觸して

ある府縣並に市町村の技術員を養成する場合と、農業技術員を養成する場合には、その養成費に對して補助をする。或は病菌、害虫の驅除豫防に對しては、年々六七萬圓の補助金を出して、大いに事業の督勵に努めてゐるが、病菌、害虫の驅除豫防に當る所の技術官を養成するにも種々の奨励策を講じてゐる。將來も繼續擴張して、少しでも内地生産の増殖に貢獻したいと思ふ。

斯くの如く増殖の諸施設を考へ來れば、内地食糧の向來も左程悲觀すべきではないのである。尤も何十年も何百年もの未來は、人口なり國狀なりが變化するから、食糧問題も自ら變ぜざるを得ない。従つて自給自足なども全然不可能となり、大變革を來たし、その時にはその時に處する方針に向つて進んで行くであらうが、兎に角こゝ二三十年間は、督勵宜しきを得ば、増殖の實を得て、食糧に不足を告げるやうなことはなからうと思ふ、唯此政策が能く農業者に徹底するか否かに於て問題は岐るのである。能く徹底したならば、我々はわざ／＼外米を輸入する必要もなく、又場合によれば代用食を強行する必要もなしに、十分米の生産のみ依つて立つて行けると思ふが、なか

く吾人の企畫通りに實行は出來ないものであらうけれども、國家の食糧の基底が固められてないと、今回の大動亂の如き一旦の緩急に處して忽ち食糧問題に苦しめられねばならないのであるから、同胞七千萬の共同責任を以て、事なきの日に事有るの日に慮り、戒心一番大いに努力すべきではあるまいか。

四 食糧慣習馴致の急務

事なきの日になすべき事は、代用食に就て不斷に訓練をして置く事である。歐米諸國の食糧品を見ても、日本の如く米許りに執著して居る國はない。彼等は一つは麥と馬鈴薯、或は麥にしても黑麥、小麥、大麥、これらのものを並び用ひて居るのである。而かもその用ひ方に偏頗なく、相當に平均されて國民の食糧となつてゐるのである。唯佛蘭西のみは例外的に、我國の食糧事情に似たところがあつて、小麥を偏食してゐるのである。佛蘭西の麵麩といへば、非常に優良なる小麥を材料として造つたものであつて、吾々の間でも佛蘭西麵麩と云へば非常に珍重されるのであるが、古來佛

蘭西人が小麥に對する嗜好力が強かつた結果、今回の歐洲戰亂に處して、食糧方面では非常に窮乏に陥つたのである。佛蘭西は平常でも幾分づゝ外國の小麥を仰がなければ、國內の需要と供給のバランスがとれて居なかつたのに、戰亂の結果外國品の輸入不自由となり、或は獨逸の潛航艇のために運送船を破壊せられなどして、食糧問題に一大頓挫を招いたのであつた。非常に窮地に陥りつゝも、佛國民の小麥に對する執著は牢固として抜けず、中々外國品に向かなかつた。亞米利加、英吉利に於ても、或は伊太利、獨逸に於ても、短期に生育して而かも收量の多い馬鈴薯、或は麥類の中でも割合に生産力の多い黑麥、斯ういふものゝ生産を非常に奨励し、これに對する消費も頗る増進したのであるが、佛蘭西は其の増進の程度が極めて微々たるものであつたことは、その戰時政策の上に能く現はれてゐるのである。亞米利加の參戰前暫くの間は、佛國が食糧に窮したことは非常なものであつて、吾々の想像では、彼の亞米利加の參戰が今暫く遅れてゐたならば、佛蘭西は食糧の方面から破れて國運は何う變化してゐたかわからないと思へた。寧ろ食糧問題に潰れて楯を收めねばならないやうな國辱に終

つたかも知れない。ところが恰も良し亞米利加が參戰して、盛に食糧たる小麥を入れたので佛蘭西の士氣が大いに揚り、遂に名譽ある戰果を收め得たのである。これらの點は移して以て吾人の教訓とすべきものではなからうか。米は非常に良い滋養分を持ち、殊に日本人の嗜好に投じてゐるのであるから、無論排斥はすべきものではないが、唯是許り食つて他の物は食はないといふやうな慣習になつてゐては、一朝有事の際に處して、非常な危機に遭遇しなければならぬから、特に適當な代用食を相當の嗜好に馴致し、不斷から之に對する慣習を付けて置くことは肝要なことと思ふ。殊に甘藷とか馬鈴薯等の生産増加もなか／＼巨額なものがあつて、將來は米麥を凌ぐ程の收量となり得ると思ふ。どんな赤土であらうが、砂地であらうが生育するのであつて、少く巧く栽れば一反歩から六百貫もとれるのである。六百貫の中の水分を去つても、乾物量に於て僅に米の四石餘に相當するのである。米は四月に種子を播き十月に刈り取り、反當り收量平均一石八斗一升位で、能く穫れて二石五六斗、最上のもので四石五石、若しくは六石と云ふ例外的のものもあるが、平均生産に就て云へば米は馬鈴薯に劣つ

て居る。而かも所撰はず出来る馬鈴薯に就て、將來この方面の生産増加を督勵すると同時に、新しい食糧慣習を涵養することが國家の重要任務であらねばならぬ。

五 終に臨んで

以上述べ來つた點で米の生産、消費の關係並に之に對するところの對應策の大體を盡したが、繰返して言ふことは、兎に角今日に於ては年々歳々、平年に於ても二百萬石乃至三百萬石位米が不足してゐるのであつて、是を補ふことは必ずしも困難でない、外國米の恩澤に依らずとも十分解決の途がある。今一步内地米の生産に對して獎勵を加へるならば二三百萬石は直ぐに補充がつく。更に馬鈴薯及び甘藷に向つて國民の嗜好が進んで來れば、今日の食糧問題に解決を與ふるのみならず、我國將來の食糧の安定を期することが出来るのである。國家の獨立自存上、食糧の自足自給と云ふことが必要條件である以上、吾人は刻下の急務のため、將た又將來國家百年の大策の下に、益々著實に努力しなければならぬのである。農村に向つては食糧増殖を以て社會

奉仕の重要務なることを徹底せしめ、都會に向つては食糧慣習の涵養こそ、社會連帶の一義務なることを會得せしめねばならぬ。斯くして單式食糧主義は破れて、合理的の複式食糧主義に榮ゆる民族こそ、世界の將來に意義ある存在を全うすることが出来るであらう。

(了)

大正九年四月九日印刷
大正九年四月八日發行

(定價廿錢)

編輯兼發行人

東京市赤坂區溜池町三十一番地
上野他七郎

印刷者

東京市神田區中根町十七番地
渡邊市太郎

發行所

東京市赤坂區溜池町三十一番地

中央報德會

振替貯金口座東京九七〇〇番

—(中外印刷株式會社印刷)—

食糧問題研究の寶典

農學博士 稻垣乙丙先生述
食糧問題に就て

送價
料二
二十
錢錢

法學博士 矢作榮藏先生述
食糧問題解決策

送價
料二
二十
錢錢

東京高等師範學校教授 中島信虎先生述
食糧の經濟と調節

送價
料二
二十
錢錢

農商務技師 岡出幸生先生述
食糧政策に関する諸問題

送價
料二
二十
錢錢

發行所 東京市赤坂區 中央報德會 九七〇〇番

思想問題研究の寶典

文學博士 澤柳政太郎先生述
思想の動搖に就て

送價
料拾
二五
錢錢

法學博士 一木喜徳郎先生述
民心の歸嚮統一

送價
料拾
二五
錢錢

日南福本誠先生述
現代思想と立國の大本

送價
料拾
二
錢錢

中央報德會講師 內務省囑託 村田宇一郎先生述
地方經營の道德的基礎

送價
料貳
二拾
錢錢

發行所 東京市赤坂區 中央報德會 九七〇〇番

自 治 研 究 者 の 寶 典

<p>増補 内務省地方局編 地方改良の要項</p>	<p>井口丑二先生著 地方改良の方法</p>	<p>中央報徳會編 戦後の地方改良</p>	<p>内務監察官 守屋榮夫先生著 地方自治の精神</p>
<p>價 參 拾 錢 送 料 四 錢</p>	<p>價 五 拾 錢 送 料 六 錢</p>	<p>價 貳 圓 送 料 拾 貳 錢</p>	<p>價 壹 圓 貳 拾 錢 送 料 八 錢</p>
<p>本書は地方改良の要項を簡單明確に知悉せしめんが爲め地方局に於て編纂せるもの、地方改良の何たるを知らんとする人は、是非一讀を要す</p>	<p>者治く各地の模範町村を視察したる經驗と材料とを骨子とし如何にせば優良町村たり得べきかを内外の實例に就き詳述せる者也。</p>	<p>本會主催第二回自治講習會に於ける諸講師の講演を蒐めたるものにして、戦後我國運の發展に伴ひ地方改良上如何なる施設を爲すべしかを指示せるものにして、自治當事者必讀の良書たり。</p>	<p>本書の特色は單に地方公共團體の形式的方面を解説するに止まらず、更に進んで其の實質を解剖し、雄大な使命を説示せる點に在り、即ち地方人民の理智的開發に在り、情操的涵養を主眼とせる所に在り</p>
<p>發行所 東京市池田町三十一番地 中央報徳會 振替東京〇〇七九</p>			

山 崎 延 吉 先 生 著 書

<p>最新刊 田舎草紙</p>	<p>版四 優良町村の建設</p>	<p>版三 食料の獨立 附 農村振興策</p>	<p>版五 婦人の覺醒 附 女房の善惡觀(圖表)</p>
<p>價 三 拾 錢 送 料 二 錢</p>	<p>價 貳 拾 五 錢 送 料 四 錢</p>	<p>價 拾 錢 送 料 貳 錢</p>	<p>價 貳 拾 五 錢 送 料 貳 錢</p>
<p>農村の振興、農事の改良に當る人の精神的向上を奨め、且つ其の模範たるべき篤志家の事例を顯示せるものなり。</p>	<p>如何にして優良町村を建設すべきか、之に與る町村自治當局者、町村會議員及町村民の責務と心得とを簡明適切に説ける者也。</p>	<p>食料獨立の必要なることは今回の大戦に依りて最も適切に證明せられたる所也。山崎先生憂國の至情進りて成れる者即ち本書也。</p>	<p>本書は婦人の天職を明かにし、其の自覺に資し、其の向上に後援せんが爲め、著者が满腔の同情を以て著はされたる者なり。</p>
<p>發行所 東京市池田町三十一番地 中央報徳會 振替東京〇〇七九</p>			

最新刊
民 育 雜 話
内務省囑託 中央報徳會講師 村田宇一郎先生著

價 參 拾 錢
送 貳 錢

著者最近一年有餘、全国各地を巡遊し、親しく實地に就き視察し、其の推奨に値する幾多の事例に就き、其の粹を蒐めたる者にして、地方自治民育事業の好標本たり。

最新刊
都 市 問 題 の 研 究
米國、フレアリック、ホウ博士著
神奈川縣理事官 長岡喜一先生譯述

價 一 圓 五 拾 錢
送 八 錢

本書は歐米都市制度の内容其他各般の施設を徹底的に研究したもので、方今の一切の都市問題も包含し、所論穩健、譯文流麗、荷も最近の社會問題に接觸して、時勢に後れざらんと欲するもの、座右に缺くべからざる良本である。

再版
歐 洲 大 戰 美 談
田中陸軍大臣序 東京府立奥寺龍溪譯述
故井上東京府知事第三高女教諭

價 七 拾 五 錢
送 六 錢

交戦各國が、國運を賭して英雄を決せる歐洲大戰の巷には、勇壯激烈の美談極めて多し、本書は之を傳へて、世の青年子女に殉國の精神を鼓吹するの好資料たり。

最新刊
米 國 に 於 け る ア ル コ ー ル 戰
内務書記官 田子一民先生著

價 參 拾 錢
送 四 錢

世界の驚異たる米國全州の禁酒案通過を目撃せる著者が感慨の餘り米國禁酒運動の歴史を詳叙したるもの、總假名付なれば何人にも読み易く、解し易きものなれば是非一讀すべき快著なり。

再版
新 報 徳 記
神奈川縣社會課長 佐々井信太郎先生著

價 壹 圓 五 拾 錢
送 拾 錢

青年立志の好模範たる二宮尊徳翁の傳記並に其の教養を詳説したる者一讀眞に懦夫をして起たしむるものあり。

再版
實 業 補 習 學 校 と 公 民 教 育
内務書記官 田澤義輔先生著

價 參 拾 錢
送 貳 錢

本書は著者が曩に天下に公にして絶大の好評を博せる『農村補習教育之研究』を絶版に附し更に最新の研究に基き新に稿を起せるもの

十版
農 村 小 話
愛知縣立農林學校校長 山崎延吉先生著

價 貳 拾 錢
送 貳 錢

題して農村小話といふも、實は萬人の訓戒たるべき逸話、座右の銘等を書きつけたるもの也(萬朝報評)

七版
二 宮 尊 徳 翁 金 言 集
井口丑二先生撰

價 貳 拾 五 錢
送 四 錢

二宮翁大教訓の精髓は收めて此書中に在り以て修養の指針となすべく座右の銘となすべきものあらん

發行所 東京池田町三十一區 中央報徳會 振替東京〇〇七九

發行所 東京池田町三十一區 中央報徳會 振替東京〇〇七九

著 生 先 二 丑 口 井

<p>刊新最 報 德 清 談</p>	<p>刊新最 時 代 と 報 德</p>	<p>版再 處報 世德 修 養 新 話</p>	<p>再增 版補 報 德 湖 源</p>
<p>錢拾七價 錢四料送</p>	<p>錢拾九價 錢六料送</p>	<p>錢拾七價 錢六料送</p>	<p>錢拾五圓壹價 錢拾料送</p>
<p>著者の別著「時代と報德」の姉妹篇にして報德の原理原則より、衣食住問題、禁酒問題各種の健康法等に至るまで細大論述せる者、趣味と教訓とを併せ得べし。</p>	<p>本書は報德の眞髓は固より地方自治の要訣農村振興の秘策より現代生活に於ける地方爲家の事業の至るまで論述せりされば報德の教養新しき時代を生活せしむる爲に就て學ぶ所あれ</p>	<p>著者が學生の心血を凝ぎて大成せる「報德湖源」の大要を、更に平易通俗に説述せるものなれば、何人も本書を讀めば、翁の教養の眞髓を體得し、處世修養上の好指針たるものあらん。</p>	<p>著者萬事に放弛して日光市を讀破し、翁の眞髓を究めしむるの組織的の解したるものなきを、本邦唯一の報德哲學と稱すべし。</p>
<p>發行所 東京市東區 池田町三十一番 中央報德會 振替東京 〇〇七九</p>			

04/11/14
21

~~373~~
~~477~~

611.31
- 0.38

終

